

# パラリンピック報道における障害者アスリート像の変化 ーロンドンからパリまでの10年にわたる新聞記事の比較分析ー

健康スポーツマネジメントコース

5023A028 肖 茗月

研究指導教員：中村 好男 教授

## 【序論】

本研究は、2012年のロンドンパラリンピックから2024年のパリパラリンピックまでの約10年間にわたり、日本の主要全国紙（朝日・読売・毎日）がパラリンピック報道をどのように扱ってきたかを比較・検証し、その変化を通して障害の捉え方・報道の焦点・ジェンダーの三つの視点などがいかに報道に反映されてきたかを明らかにするものである。パラリンピックは、障害者スポーツの振興だけでなく、社会的包摂や多様性の尊重を促す国際的イベントとして世界的に大きな注目を浴びてきた。しかしながら、新聞やテレビをはじめとするメディアにおいては、「感動ポルノ」や「超人化」されたアスリート像など、障害者を一面的に描く表現が依然として指摘されている。そうした中、IPC（国際パラリンピック委員会）とWOWOWの共同プロジェクト「WHOIAM」は、パラアスリートを単なる「感動の対象」ではなく、競技者としてのパフォーマンスや多様な背景、生き方に焦点を当てる試みを行い、注目を集めた。また、東京オリンピックで金メダルを獲得したイギリスの男子飛び込み選手が「私はゲイで、金メダリストです」と公言したことが大きく報じられたように、ジェンダーやセクシュアリティの多様性がスポーツを舞台として可視化される動きも進んでいる。こうした背景から、本稿は複数大会（ロンドン・リオ・東京・パリ）の開催期間中に新聞記事を収集・分析し、「障害はいかに描かれているのか」「報道の焦点はどのように変化しているのか」「女性アスリートの扱いにどのような違いが見られるのか」「多文化的視点はどうか広がってい

るか」といった論点を検証することで、パラリンピック報道がこの10年でどのように変容したのかを考察する。

## 【方法】

分析対象は、朝日新聞・読売新聞・毎日新聞の3紙に掲載されたパラリンピック関連の記事である。2012年ロンドン大会から2024年パリ大会までの各開催期間中に掲載されたニュース・社説・解説・特集記事を検索データベース（朝日新聞デジタル、ヨミダス歴史館、毎索など）から抽出し、「パラリンピック」「パラ」などのキーワードでヒットした記事のうち、報道内容が明確に競技・選手・障害者スポーツに関わるものを最終分析対象とした。キーワード出現頻度（「努力」「乗り越え」「挑戦」「感動」など）や、記事が取り上げるテーマ（競技結果・個人パフォーマンス・社会的つながり・ジェンダーなど）に基づいて分類し、統計学的な検定（カイ二乗検定など）を用いて2012年と2024年の差異を中心に比較した。また、女性アスリートの扱い方や呼称、男性選手との報道量の比率などを抽出し、ジェンダーバイアスの程度を検証した。

## 【結果】

第一に、障害の描写においては、2012年時点で「障害を克服すべきもの」とする表現が多く見られたが、2024年でも、障害者アスリートが困難を「乗り越え」、新たな「挑戦」に挑む姿が、感動的なストーリーとして報道されていることが明らかになった。第二に、勝敗や競技成果を伝える記事の比率は2012年より低下し、「社会的

なつながり」や「多様性・共生」を強調する報道が統計的にも有意に増えていた。第三に、女性アスリートへの注目度が大幅に上昇しており、報道の呼称や内容も「妻・母」といった伝統的役割だけでなく、多様な背景やリーダー像が描かれる方向に変化していた。ただし、依然として男性選手との扱いには差異が認められる。

#### 【結論】

全体として、新聞報道は確実に変容しつつあるが、障害をめぐる固定的な物語フレームや、ジェンダーバイアスな視点が色濃く残っている部分もある。パラリンピックの社会的意義や障害者スポーツの魅力を報道するにあたり、今後は一層、社会モデルに基づく視点やインクルージョン、多様性尊重をより踏み込んで取り上げることが求められると考えられる。